北村四郎先生（1906–2002）
A Tribute to Professor Siro Kitamura (1906–2002)

京都大学名誉教授の北村四郎先生は平成14年3月21日に老衰のため95歳で亡くなられ，24日に公益社の北ブライトホール（京都市北区紫野宮西町）で葬儀が行なわれた．祭壇が2階に設けられ，一般の参列者は焼香の後，階下のテレビで葬儀の進行を見るようになっていた．しかし設営がまずく，葬儀委員長の岩槻邦男さんが弔辞を読んだが，氏の後姿がテレビの画面に写って見えるだけであり，音声はまったく聞こえなかった．ずいぶん長い間，岩槻さんの後姿が写っており，ていねいな弔辞らしいことはわかったが，聞きたいと思うその内容は残念ながら知ることができなかった．

恩師のご葬儀の日，京都から帰宅してすぐに書庫の『北村四郎選集』I～Vを取り出して書斎の本棚に移した．その後，ときどきこの選集を拾い読みして，在りし日の先生を偲んでいる．北村先生の文体は独特であり，その文章を読むと先生の肉声に接しているような親しみを覚える．巻Vには誕生から87歳までの先生自身に関する年譜が載っている．76ページにわたるきわめて詳細なものであり，先生の経歴や業績はそれを見るとよくわかる．この年譜によって，北村先生は日本のこれまでの植物分類学者の中で経歴や業績がいちばん詳しく正確に後世に伝わる人ではないかと思う．

北村先生は昭和45年に京大を定年で辞められたが，その後も30年間ほど旺盛な研究活動を続けられた．定年後，再就職をせず，何の役職にもつかず，いっさいの名誉職を断り，研究と執筆に専念し，研究者として理想的な余生を送られた．現役時代の大学の教育や管理運営にかかわる煩わしい仕事から解放されて，好きな植物の研究に没頭し，その成果をまとめた本を次々に出された．京都市左京区田中東高原町15のお宅は京大植物学教室に近く（徒歩で15分ほど），現役時代と同様に同教室所蔵の文献や標本を利用できるという環境にあったことも，稔り多い退職後の生活を送ることができた要因の一つであろう．

『北村四郎選集』は一人の碩学が定年後に成した芳潤な果実である．そこに収められた記事の多くは過去に発表されたものであるが，この選集のために新たに書かれたものもかなり含まれている．また，発表済みのものも選集に収録するに当たって加筆されている．先生の生涯にわたる業績が集約されているのであり，全5巻，通算2,827ページに，植物および植物の研究に関する膨大なデータが詰め込まれている（データが多すぎて読みづらい面もある）．和漢洋の文献を駆使した博引旁証は驚くべきものがある．先生は亡くなられたが，先生の頭に詰まっていたきわめて該博な知識の多くをこの選集によっていつでも引き出すことができる．

北村先生の博覧強記を支えているのは驚異的な記憶力である．先生の記憶は植物に関することだけではない．誰がいつ何をしたかといったことまで実によく覚えておられた．昭和31年の夏に北村先生の指導で，学部4年生と3年生の合同の野外実習が北海道の東部で行なわれた（この年の実習に参加した学生のうち，4年生の岩槻邦男さんと3年生の私の二人が後に分類学を専攻することになった）．この実習で，8月26日に雌阿寒岳に登った（この日付も先生の「年譜」によって知ることができた）．私は学生時代には体力が弱く，登山の途中から苦しくなって山頂に達したときには気息奄々といった状態であった．先生は後々までもそれを覚えておられ，「君は雌阿寒岳で……」とたびたび言われて閉口した．そのときに先生から教わった雌阿寒岳の植物については何も覚えておらず，植物分類学というものは肉体的にきつい学問だなと思ったことだけが記憶に残っている．

子どものころから物覚えが悪く，強いコンプレックスを抱いてきた私にとって，先生の超人的とさえ思われる記憶力は憧憬の的であった．その並外れた能力はいったい何に由来するのであろうかといぶかり，ひょっとしたら

頭の形が常人とは違うのではないかと考えて，講座の忘年会で席が隣り合わせになったとき，先生の頭を間近に詳しく観察したことがある．密かに後ろへ回って，後ろ側からもつくづくと眺め，先生の後頭部がいわゆる「絶壁」であることを発見した．先生の書かれるものはオリジナリティーが高い．例えばスギのようなごく平凡な植物に関するちょっとした記述にも，ご自分の見聞に基づく新しい知見が織り込まれている．短い記事にも，他書には書かれていない事実が必ず指摘されているのである．先生の顰みに倣って，たぶん誰も指摘したことがないであろう，先生の後頭部が「絶壁」であるとの観察結果をここに記録し，この追悼文にささやかなオリジナリティーを添えたいと思う．

私は1970年の秋にオランダのライデンにしばらく滞在したが，そのとき，小さな古本屋で，J. Hoffmann et H. Schultes: Noms indigènes d'un choix de plantes du Japon et de la Chine（Leiden, 1864）を見つけた（90ページの薄っぺらい本であり，500円ほどで買ったと記憶している）．これは日本と中国の植物650種について，学名に対応させてその和名と漢名を挙げたものであり，和名はフランス語読みのスペルで表し，漢名は漢字で表記し，その発音と日本語の読みを記している．この本は日本産の高等植物の研究にとって歴史的に重要な文献であるとの想像はついていたが，コケの分類を専攻している私自身には不要なものである．『北村四郎選集』I～IVを通読して，北村先生がこの古い文献をたぶん見ておられないとの見当がついたので，長らく私の研究室に死蔵していたこの本をお送りした．それに対する先生からの返事には，これは松村任三さんの『植物名彙』のタネ本であり，若いときから見たいと思っていた文献である，東大植物学教室にあることは知っているが見たことがないと書かれていた．そして，思いがけずこの貴重な文献を見ることができて「長生きした甲斐がありました」と書いてあり，先生がたいへん喜んでおられることがわかってうれしかった．

私にとって価値のない文献を差し上げたことへの返礼として，先生から八坂書房発行の江戸時代の園芸書，伊藤伊兵衛（著）『地錦抄』の4部作（八坂書房版では3冊にまとめられ，北村先生の解説記事が載っている）をいただいた．また，選集のI～IVは自分で買ったが，Vは先生から頂戴した．500円の本によって，9,400円の『地錦抄』と12,000円の『北村四郎選集』Vを得たのであり，まさにえびで鯛を釣るといった感があった．

北村先生から「えび鯛」の恩恵を受けたことがもう一度ある．先生が平成5年に第1回松下幸之助花の万博記念賞を受賞されたので，お祝いの葉書を出したところ，しばらくして先生から小包が届いた．それは先生の論文の別刷であった．その時点で残っている別刷の1セットであり，その中には先生が25歳のときに自費出版したCompositae Novae Japonicae（1931）の論文も含まれていた．

先生は，若い頃には図書室に入ってCurtis's Botanical Magazineの美しい植物画を見るとぞくぞくして便秘が治った（40歳の頃からは効き目がなくなった）と言っておられた．風邪を引いたときに，ハーバリウムに入ってナフタリンの匂いを嗅ぐとスーとして気持ちがよくなり，鼻づまりが治るとも言っておられた．近年明らかになったナフタリンの発ガン性はわれわれ植物分類学の研究者にとって気になる問題である．数年前に小山博滋さんに会ったとき，「国立科学博物館ではパートタイムの職員はハーバリウムに入れない，もし病気になってナフタリンのせいだと訴えられたら敗訴するにちがいないから」と聞いた．しかし，たいていの人よりもナフタリンをたくさん吸っている植物分類学者の多くは長生きしているのであり，その発ガン性についてあまり神経質になることはないと思う．実際，北村先生は70年間ほどナフタリンを吸い，しかも晩年まで旺盛な研究活動を続けて長寿を全うされた．

北村四郎先生について書くべきことはまだたくさんある．同じ年齢で亡くなった牧野富太郎博士と経歴や業績や社会的な評価などを比較することも面白いと思っているが，それは別の機会に譲りたい．

（北川尚史）